

日常生活史 — A氏の場合

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、マールブルク大学（ドイツ）のプロジェクト・チーム「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料⁽¹⁾の中のひとつを分析してまとめたものである。当該資料は、1980年3月に被インタビュー者の自宅で4時間にわたって行われたインタビューを、A4タイプ用紙144ページに書き起こしたものである。この資料を分析し、まとめるに当たって、私が以前に書いた論文⁽²⁾で提起したインタビュー資料の分析法を使った。

A氏はインタビューの間、実際にはブラウンシュヴァイク地方の方言や口語で語っているが、本稿ではA氏が1人称で標準語で語る形式をとった。こ

(1) G. Hardach (プロジェクト主任/マールブルク大学教授), S. Bajohr (現在ノルトライン・ヴェストファーレン州政府), B. Händler-Lachmann (現在歴史ワーク・ショップ・マールブルク) からなるマールブルク大学の研究プロジェクト「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」が、以下のように行ったインタビューを録音したカセット・テープから、書き起こしたものである。調査対象者は、1890年から1914年までに誕生し、ワイマール共和国末期まで同地で生活していた労働者家庭出身で、自身も労働者であった21人の男女。インタビューは同地出身で、方言に通じているBajohrによって、1980年初頭に各々3時間から8時間、1例を除き、対象者の自宅で実施された。インタビューの大枠から外れないようにとの意図から、共通のテーマ項目からなる質問表が使用され、かつ臨機応変に自由な対話ができるような態勢がとられた。

(2) 宝福 則子(1988): インタビュー資料の分析 — 「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」を手がかりに、岩手大学人文社会科学部『テキスト分析の研究 — 日・独テキストの対照研究を中心に』 — 昭和62年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書

ここで、参考のため、まずA氏の略歴と家族について簡単に記しておく。

1903年6月7日誕生

職業 電気工マイスター

1918年—1925年ドイツ工場・農業・未熟練労働者同盟組合員

1925年—1968年ドイツ金属労働組合員

1922年頃から ドイツ社会民主党員

1925年8月1日レストラン手伝いのエルナと結婚

1968年 エルナは結婚後は主婦

年金生活に入る

父 1857年ブラウンシュヴァイクで誕生，同地で1924年に死亡

職業は道路舗装工，工場臨時工，季節労働者を転々とす

ドイツ工場・農業・未熟練労働者同盟組合員

ドイツ社民党员，ドイツ独立社民党员

母 1869年ブラウンシュヴァイクで誕生，同地で1934年に死亡

職業は縫い子，缶詰工場労働者，未組織

出産7回

子供 2男2女

1. 両親について

父は、1857年12月4日にブラウンシュヴァイクで生まれ、職業は徒弟修行の修行資格のある道路の敷石の舗装工でした。でも夏の間は舗装工として働きましたが、雨続きの日や冬の間は野菜のチコリ（：白菜を小さくしたような形の苦みのある西洋野菜）から代用コーヒーを作るチコリ工場で働きました。今とちがって、仕事がないと、賃金は貰えなかったのです。1909年に仕事の中に眼を怪我して、道路舗装工としては働けなくなりました。眼に石が入り、石を取りだすために何度も眼を焼かれたり、長年苦しんだ末に、片

眼を摘出されました。1924年に亡くなった時に解剖され、死因は脳腫瘍とわかりましたが、この眼の怪我が直接的な原因かどうかはわかりません。

1909年以降は、ブラウンシュヴァイクのハウスヴァルト社やブライプトロイ社、グロトリアン&シュタインヴェーク社などの代用コーヒー工場で仕事があると、臨時の包装工として働きました。ずっとブラウンシュヴァイクで働いていましたが、1905年の38週間大ストライキの時だけは、レーアテへ行って稼ぎました。土曜日にだけ、家に金を持って帰ってきたということです。

母は1869年にブラウンシュヴァイクで生まれました。職業は縫い子ですが、どこかで働いていたのかどうかはわかりません。私が知っているのは、自分や他の娘さんたちの服を縫っていたということだけです。結婚後は、早朝のパン配達とアスパラガスの缶詰工場で皮むきをしていました。私が10歳の頃、朝出かけて夜の9時か10時に帰ってくる彼女を待っていたものです。華奢な体でしたが、出来上がった缶詰を1m×1mの大きな箱一杯に入れて、リアカーで坂の上の倉庫まで運ぶのです。馬のように働きました。第1次世界大戦の直前に、もう子供たちが大きくなっていましたから、この仕事をやめました。それでも少しアスパラの皮むきの仕事をしていました。1934年に亡くなる前の数年間は、年金を受けていましたし、私も、仕事をやめて家にいるように言いましたから、仕事はしていません。

両親のなれそめは、カイザー通り4番の母の家でした。つまり、私の母方の祖父母の家です。祖父は鉄道の機関車の運転手でした。そこへ私の叔父が下宿して、父が叔父を訪ねた時にマリーちゃんと知り合って、1888年に結婚したというわけです。

2. 兄弟姉妹について

私は、1903年にブラウンシュヴァイクのウィルヘルム通りで生まれました。両親は私の他に長兄のヘルマンを1889年、ルードルフを1895年、姉のゲルトルートを1897年、妹のイルゼを1909年に生みました。その他に

1891年頃に生まれた兄がいました。彼の名前はわかりませんが、脳膜炎で9歳で亡くなったそうです。ケーテという妹もいましたが、この子は生まれてまもなく亡くなりました。

長男のヘルマンは1907年に事故死しました。彼は道路の敷石の舗装工見習いだったのですが、工作中、山積みの石の上から足をすべらせたところへ電車が来て、足が車輪に巻き込まれたのです。彼は「電車をバックさせてくれ、バックさせてくれ」と言ったそうです。そこへ消防隊が来て — 昔は馬で来たものだそうです — 彼らが電車を持ち上げて、やっと電車から解放されましたが、足のあちこちと腰の上までも骨折していて、それから3、4時間はまだ生きていたそうです。しかし出血多量で亡くなったのです。

イルゼはジュート工場で未熟練労働者として働いていましたが、肺結核がもとで20歳の誕生日の2日前に亡くなりました。彼女は小さい頃からジュート工場で働いていました。工場の機械の前で2回も咯血したのに、誰も注意しなかったのです。知識もなかったし、それに第1次世界大戦の頃は栄養状態も悪かったから、その影響もあるのでしょうか。2人とも若かったですから、結婚することもなく亡くなりました。

ルードルフは2度結婚しました。最初は戦争直後、1919年頃で、2回目は1946年頃でした。どちらの奥さんも働いてはいませんでした。彼は職業教育は受けていなかったのもので、臨時工として建設現場やパン屋で働きましたが、戦争で怪我をして56歳で亡くなるまで、ほとんどを年金生活者として暮らしました。

ゲルトルートは缶詰工場で働いていましたが、やはり未熟練労働者としてですが、子供の面倒を見てくれる人がいないので、仕事をやめました。子供は3人です。彼女の夫も臨時工としてあちこちで働きました。最後は公園の番人をしていて、仕事の中に車に轢かれて亡くなりました。彼女はまだ健在です。

3. 子供時代の住居

私が生まれた1903年には、両親はウィルヘルム通り69番に住んでいました。屋根裏部屋で、屋根の下にはすずめが巣を作っていました。ここに両親と子供4人で住んでいました。6歳くらいの時にはルードヴィヒ通りでした。ここも屋根裏部屋でした。台所兼居間、細長い部屋、寝室がありました。トイレは1階下か、1階半下の階段の踊り場にありました。風呂はありません。両親と小さな妹と私は両親の部屋で寝て、兄と姉は別の部屋で寝ました。屋根裏の洗濯物干し場と地下の物置もありましたが、地下の物置のことはよく覚えていません。同じ階にはその他にまだ部屋がありました。下の階の住人の所有の居間と台所からなる住まいが2つと、まだもう1つ部屋がありました。それはさらにもう1階下の住人のもので、又貸しされていました。各家専用の廊下はなく、独立した住まいではありません。妹はここで生まれました。丁度その年に、父が仕事の石割りの時に、事故にあったのです。彼は、かなり長い間、仕事ができなくて、家賃を滞らせたので、私たちはその家を追い出されました。家財道具から何から手当たり次第、何から何まで窓から下の道路に、文字通り放り出されたのです。寝場所がなく、公園のベンチで夜をあかしたものです。兄のルードルフは木の上に座って寝ました。

父はあちこち駆けずり回って家を探しましたが、子供のいる貧乏な家族なので、敬遠されました。それで、私たちはプフレーゲハウス通りの児童養護施設に入りました。私の末の妹は乳児室へ、姉は少女室に、兄は少年室に入りました。私はまだ学校へ行っていなかったので幼児室でした。母は、この婦人宿泊所に入りました。父は友達のところ身を寄せました。家族がばらばらになったのです。日曜日に父親が訪ねて来ると、家族全員が揃い、私たちは父と母について回ったものです。父には「親玉のフリッツ」という友人がいました。シャツハという名前でしたが、仕事仲間ではありません。どういう関係で知り合ったのかは知りません。父はよく日曜日に2時間か3時

間、彼と森へ鳥を捕まえに行きました。そういう時、シャツハは小壘を持っていました。途中で飲んでしまうのです。ある時、母がその壘の中の酒を捨てて、酢を入れました。今もあのロードヴィツヒ通りが目には浮かびます。父はこのシャツハのところに身を寄せたのです。

この養護施設に半年くらいいた後、マダーメン通り 45 番に越しました。私の小学校入学直前ですから、1910 年 3 月頃です。

マダーメン通りの住まいでは、大きな居間に部屋が 2 つと台所がありました。トイレは中庭にありました。階段を降りると長い通路があつて、中庭の家の裏側にトイレがありました。風呂はありません。外で水浴びをしました。それからそこらへんを走り回って乾かすのです。ここも独立した住まいではありません。階全体でドアが 2 つありました。階段室のドアから台所へ 1 つと居間へ 1 つ。居間から 1 つの部屋へ、そして台所からもう 1 つの部屋へ通じていました。地下室と屋根裏の洗濯物干し場もありました。ここには 1914 年の初めまで、戦争が始まる前まで住んでいました。

その次は中州のケトゲンハーゲン 2 番に住みました。今度も屋根裏部屋です。2 階建ての家で、私たちの屋根裏部屋は 3 階でした。父が亡くなって、結婚後も母と妹と一緒にここに住みました。私の上の子供 2 人もここで生まれて、1928 年か 29 年までここにいました。この住まいにはベットが 3 台入る大きな居間がありました。居間の壁だけが垂直でした。4 人の子供たちの部屋は壁が傾いた小さい斜めの部屋でした。ベットは 2 台入りでしたが、並べては置けませんでした。もうひとつ本当に小さな部屋があつて、小さなマットレスを置いて寝ましたが、すぐ横は固い壁です。つまり、3 部屋の住まいで、1 階下の階段の踊り場がトイレで、風呂はありませんでした。

この家の持ち主は何度も変わり、私たちの他に 5 家族が賃貸で住んでいました。家賃ははっきりとは覚えていませんが、当時は週給分といったものです。住人はみんな労働者でした。1 人は機械工で、MIAG 社で働いていました。彼の息子はプロペラ工として昔のアムメ・ギーゼッケ & コネゲン社にいました。私たちの向かいの部屋には説教屋のツィームトという男が住んで

いました。私たちのさらに上の本当の屋根裏部屋にはファウペル社で働くツイーグラーという男が住んでいて、その娘はブラウンシュヴァイクの市の出張所にいました。下の階には牛乳屋のおかみさんがいました。彼女は自営業といっても牛乳缶は自分で洗っていたし、自分でリアカーを曳いて牛乳をとりに行き、ふうふう言いながらマダーメン通りで牛乳を売って歩いていました。ですから彼女の状態も労働者より良いとはいえませんでした。そして大家のアンナーシュタイン一家です。この一家は小さな雑貨屋も営んでいましたが、つけで買い物をする客ばかりでした。中庭の小さな家には屑屋の家族が、大きな子供も一緒に住んでいました。彼はぼろ布や骨を集めていましたが、本物の軍隊ベルトをベットのふちに掛けて、それで首をつって死んだのです。私は11歳か12歳でしたが、忘れられません。

1928年か1929年から32年まではカイザー通り1番に住みました。私たちの他に大家と2家族が住んでいました。家賃は多分20マルクでした。ここには大きな居間と広い部屋があつて、それ自体は良い住まいだったのですが、2部屋だけでした。私の3番目の子供はここで生まれました。ここも独立した住まいではなく、階段室の横に小さな台所がありました。トイレも1階下の階段室にあつて、風呂は水浴びです。4階に屋根裏部屋のある3階建ての古い家で、半地下の物置がありましたが、この物置は、各戸毎に仕切られていませんでした。間仕切り壁は太い梁に立てかけられていたのですが、その梁がそのうちに折れて家の真ん中が落ちこんできたのです。家は倒壊寸前だったのです。そこで私たちはこの家を出て、ユリウス通りに越しました。

4. 学校生活

私は国民小学校を出ただけです。私は1910年に1年遅れでビュルガー通りの小学校に入学し、1914年に中州のライヒス通りの小学校へ転校し、そこを1917年に卒業しました。小学校は6学年までですが、私は高等科へもう1年通ったのです。

ビュルガー通りもライヒス通りもどちらの学校も楽しかったですよ。私は教師とは良い関係にあって、私の受持ちだったマッティース先生は、私の結婚後も時々訪ねてくれました。学校では生徒が行儀を悪くしたり、悪戯すると、それに応じて、教師の性格にもよりますが、パイプの棒で尻を殴られました。ひどい悪戯をした時にはしたたかに殴られましたが、でもそれにあたいすることをしたのなら、仕方ありません。私は1度、作文の時間に、視学に「いんや」と答えて殴られたことがあります。「いいえ」と答えるべきだったのです。

同級生の中ではいくつかのグループがありましたが、私は友だちとよく遊び、何をするにも一緒に行動しました。殴り合いなどもありましたが、それは普通のことですよ。ライヒス通りとニッケルクルク地域の学校は、貧乏人の子供が通う学校だったから、ブラウンシュヴァイクでもっとも評判の悪い学校でした。でも貧乏だったけれど、不運にあった時も結び付きが強かったから、助け合って何とか切り抜けられたのですよ。よそからの評価に反して他の地区よりも住民どうしが平和に仲良く暮らしていました。労働者の子供の他に自営業者の子供もいくらかいました。私が自分を労働者の子供と意識したのは学校です。自営業者やホワイトカラーの経済状態は、例え安サラリーマンでも労働者よりはずっとましでしたから、彼らの子供が優先されます。教師だけではなく、子供自身が親の影響で労働者の子供を区別するので

5. 子供時代の労働と遊び

貧しかったので、家計の足しにするために私も小さい時から働きました。6、7歳の頃は、母のパン配達の手伝いをしていました。朝の4時から1時間か1時間半、母についてパンを配達するのです。でも、手伝いなのでいつもというわけではありません。規則的に働いたのは、11歳で徒弟見習いに入るまでの間、ヴェンデン通りのドラッグ・ストア「ヴェーゲ」で使い走りの仕事をしました。当時は10歳から働けたのです。その他に朝は、4時

にブラウンシュヴァイクのはずれのハーゲン通りの牛乳屋に行って、3輪の荷車で100キロから150キロの牛乳壘を家に運んでくるのです。家でイルゼがその壘を洗ったら、またそれを届けに行きました。この時に学校の道具も一緒に持って家を出て、7時に学校へ行きました。疲れて学校で居眠りをすることもありましたが、週3マルク稼ぎました。1時に家に帰り、ヴェーゲのところでは3時から6時半まで働きましたが、仕事の大半は2輪の大きなリヤカーで中央駅へ荷物を取りにいく事でした。

その他には遊び仲間と一緒に壘や馬糞を集めては売りました。鋳物工場で馬糞を使うので、結構いい値だったのです。だから誰もいないのを確かめてから馬車屋の馬小屋に入り込んで馬糞を集めたものです。鋳物工場に出た鉄カスも集めて屑屋に売り渡しました。あるいは石炭屋の配達について回って、ブリケットの荷おろしを手伝いました。昔はブリケットはこのローレンで袋詰めされていたのですよ。あとはクリスマスツリーの片付けを手伝って貰った数ペニヒで、操り人形が書かれている厚紙を買って、操り人形を作りました。またこれを売ったり、いろんな方法でお金を稼ぐことを考えついたものですが、これらは遊び仲間の友達と遊びの延長でやったようなものです。稼いだお金は母に渡しましたが、このお金で学校のノートやペンなどを買ったのです。たまにはパン菓子などをいくつか買い食いすることもありましたし、働いてばかりいたわけでもありません。

近くの山へ行って、くだらない戦争ごっこをしたり、往来や市場で遊びました。公園などまだなかった時代です。市場では管理人にいつも追い出されました。彼は棒を持って追ってくるのです。とても足が速いので、彼には注意しました。ガウスの山にも行きましたが、ここの森番も足が速かったものです。街を出て、マッシャーローダーの畑やエクセルツィーア広場にも遠征しました。

女の子たちとも結婚式ごっこをしましたよ。それから野球とバレーボールを合わせたような遊びもありました。これにも女の子は加わりました。あるいは「誰がボールをもっている」など、女の子もほとんどの遊びに加わりま

した。みんな労働者の家庭の子供でした。

6. 職業

私の職業は電気工です。学校を出て、1917年から21年までブラウンシュヴァイクのオットー・ゲールケ社で見習い修行をしました。その後いろんな会社で働きました。当時は例えちっぽけでも電気屋というものはなかったし、電気工も職業として確立していませんでした。電気工のマイスターもいなかったなので、私は建設現場で足場の組立工など建設労働者のような仕事もさせられました。1925年から26年にかけて市の公共事業局で電線施設工として働き、この時代に結婚しました。ナチの台頭する直前の1930年からフランク&ハイデッケ社に勤めて、そこで1932年か33年にマイスターの資格をとりました。この職業は4週間の仕事が終わると放り出されてしまうような職業でした。戦争末期に運転手の口を見つけてきたのですが、それで兵役免除の措置が取り消されました。そこで、ザルツギッターの製鉄所の発電所へ行きました。免除措置が無効になった当日に、ここの高圧発電所と変電所担当のマイスターになり、また兵役免除になりました。戦争が終わるまでこの職についていました。敗戦で製鉄所は解体されたので、独立しようかとも考えましたが、またAEG社で働きはじめ、1968年に年金生活に入りました。

この間、何度も失業しては新しい仕事につきましたが、失業中は失業手当を受けていました。手当は半年にわたり支給され、今の病気休業手当のように、稼いでいた分くらいの額は貰えました。その間に臨時の仕事で稼いだら、その分は差し引かれました。しかし、1924年から27年は、私たちが経験したもっともきびしい時代でした。子供たちが生まれて、健康保険に入っていなかったなので、お産の費用の工面が大変だったことを覚えています。私には貯金などありませんでした。母は年金生活でしたし、妻の実家にも11人の子供がいましたから、援助など受けられるはずもありません。だから、息子が1925年に生まれて、2年後に娘が生まれた時は大変でした。

7. 親子関係

両親とはとても良い関係でした。何か困った問題や心配事を抱えたら、具体的には今ではもうどんな事があったのか覚えてはいませんが、いつでも両親のどちらにも話を聞いてもらえると、感じていました。

お金のことは、どっちみちいつもぎりぎりの生活をしていましたから、お金の心配について家で話したことはありません。結婚後の私の家庭でもそれはありません。妻がお金がないと言えば、私は「喜べ、金を払う心配をしなくてすむよ」と言ったものです。

両親が喧嘩をしているのに気付いたことはありません。私自身の家庭でも何か問題があったら、子供たちが寝てから寝室でゆっくりと話しあったものです。そうすることによって、家族関係がうまくいくものなのです。両親の喧嘩を子供が気付いたら、大人は気付かないと思っても、子供は本当に苦しみます。

悪戯して、お仕置きに拳骨で殴られたことはありません。父は平手で叩くだけです。それも丁度良い加減でお尻を叩くのです。最後に叩かれたのは、中州のケトゲンハーゲンでした。その時、私は屋根の樋に登ったのです。家に鍵がかかっていたので、屋根から私たちの家の窓を開け、中に入ろうとしたのです。とても幅の広い30 cmほどの樋だったのですが、3階の高さです。下の道路では中州の住人たちが立って見ていました。父は私を捕まえると、まず中に入れて、すぐにお仕置きしました。でもこれは当然です。母に叩かれた記憶はありません。彼女は優しいひとで、子供をととても愛していました。自分が飢えても子供に食べさせてくれました。

8. 自分の親子関係

私には子供が4人います。みんな中学を卒業し、現在、立派な仕事についています。私と妻は無から始めて、4人の子供たちを自分たちの力だけで大きくしました。そしてお互いに経済的にも依存していません。子供たちは私

たちに良くしてくれますし、孫たちも祖父母を尊敬してくれます。彼らについて愚痴をこぼすことなど何ともありません。

長男のウィルヘルムは1925年生まれで、ブラウンシュヴァイク市役所の役職についています。戦争に行き、ロシアで11年間捕虜として抑留されていました。その間に、私たちは知らなかったのですが、娘の友達と文通していて、帰還後に彼女と結婚しました。でも彼女には私生児がいたのですよ。彼女の子供を引きとり、その間に子供を1人つくりました。私は、すぐ結婚しなくともよい、と反対したのですが、「僕は11年間も捕虜生活をしてきて、家庭に憧れていたのだから」と言いました。でも今では、「父さん、あの時、父さんは正しかったよ」と言っています。

長女のローズマリーは、1927年生まれです。今は、結婚して、働いていません。彼女の夫が働かなくてもよいと言うからです。次女のロッテ・ローレも働いていません。彼女は1933年に生まれました。そして末息子のペーターは1936年生まれで、ドイツ航空研究機関のエンジニアですよ。

8. 結婚

私と妻エルナが1925年の8月1日に結婚してから、今年でちょうど56年になります。私が22歳で、彼女は20歳でした。私たちはブラウンシュヴァイクのヴィルヘルム通りとカトリーネン教会の角にあった結婚登録所で結婚しました。教会の結婚式よりも、その方がすばらしいことだったのです。でも、結婚した時、彼女はまだ新教の教会に所属していました。

妻は1905年10月1日に、ハルツ地方のブランケンブルクで生まれ育ち、旧姓はクレゲリンです。曾祖父がスイス出身で、クレゲリンというのはスイスの名前です。彼女の父親は、ハルツのディーレンブルクで墓地の庭師として働いていました。母親はディーレンブルク出身で、主婦でした。

エルナは、美容師の職業教育を受けていますが、24年にブラウンシュヴァイクに出てきて、ヴェンデン通り60番の叔母さんの家にいました。当時はヴェンデン通りとボックストヴェーテの角の、彼女の従姉妹が経営する

レストラン「アルト・ハイデルベルク」を手伝っていました。隣は映画館でした。結婚して、中州のケットゲンハーゲンの私の母の住まいで一緒に暮らしました。私たちの部屋は小さくて、ようやくベットをタテとヨコに2台置くことができました。太陽が差し込んでくると、一人は出ていかなければならないほどに小さかったのです。彼女は結婚後は働いていません。私が「お前は、家で子供たちのそばにいなさい」と言ったのです。ともかく私1人の稼ぎで4人の子供を大きくし、家を1軒建てました。

私たちののは一目惚れの恋でした。正式の婚約はしませんでした。彼女との結婚前に、私には一度、数日間、いや数週間の恋愛ごっこのようなことはありましたが、彼女にとっては私との恋が初恋でした。私は「アルト・ハイデルベルク」の向かいに住んでいて、その電灯の修理などもしていたので、彼女とは顔見知りだったのですが、ある朝10時頃に行くと、彼女は食器戸棚の掃除中でした。そこで私は中へ入って行って、彼女の肩をつかみ、こちらに向かせてキスをしました。彼女の従姉妹が、エルナを遊びに連れだしてくれというので、当時まだ私たちは「あなたは」という礼儀正しい呼びかけをしていましたが、マッシュェへ行ったり、市電のパーティーや、このイエーガーホーフの見本市にも行きました。そして森へ行って、彼女を誘惑しました。その時に長男を妊娠したのです。

それを知った母は「何、お前はあの子を孕ませたって？ じゃあ結婚もしなけりゃあ！」と言いました。彼女は、そういうことに厳しい人でした。

9. 性・避妊

性に関しては少年の時、もちろん関心がありましたから、家にあった母の医学書を隠れてこっそり読みました。そこにはどうすると、どうやって子供が生まれてくるかなど何でも書いてありました。他の子供たちも同じようなことをしていて、お互いに話し合ったものです。コンドームのことも、13、4歳の時から知っていました。両親から何か性に関して聞かせられたということはありません。私の妻は娘に「ここへ来なさい。つまり、こうこうこう

だ……」と教えました。昔は今と違って、そういうことは恥ずかしかったのでしょうか。私の妻が初潮を見た時、母親は「これからは、お前は、男と一緒にいるときには気をつけるのだよ」と、それだけしか言わなかったそうです。

子供の時、両親が1台のベッドで寝ていたことは知っていますが、そこで何が起きているのかは知りません。ただ、養護施設からマダーメン通りへ越した時に、昔ルードヴィヒ通りでしていたように、両親の間に、真ん中に寝たいとせがみました。父は最初の数日間はそのようにしてくれましたが、「お前も別の部屋で寝れるね」と言って追い出されてしまいました。当時は何も見なかったし、聞こえもしませんでした。私は両親がキスをするのさえ見たことはないのです。今とはまったく違います。

私たちは、結婚後初めて避妊ということをしました。ウィルヘルムの出産後に、当時としては近代的な洗浄器を買いました。でもまた子供はできてしまいました。ゴムのペッサリーとメタルのリングもありましたが、妻の体質には合いませんでした。コンドームも買いましたが、そんなにたくさんは買えませんでした。だから、性交渉の途中でやめました。これだとお金はかかりません。両親の時代にも避妊具を買うようなお金などなかったから、これ以外の方法で避妊はしていなかったはずですが。

当時は今のようには避妊の情報もありませんでしたし、結構、私生児もいました。未婚で子供を生むと、世間では軽蔑されました。妻の服を縫ってくれていた娘が、ハノーファーへ行って、私生児を生みました。彼女はその子を家に連れて帰ることもできずに、首を紐で絞め殺して、刑務所に入れられました。このブラウンシュヴァイクでそんなこともあったのです。中産階級の家庭では私生児が生まれると、誰も気付かないように取り繕いましたが、労働者の家庭では子供を受け入れました。祖父母などが面倒をみるのですが、ただ、子供は酷い扱いを受けていました。外で余所の家の子供と遊んでいると、その子の祖母が遊んではいけないと叱ったりして。

10. 宗教・政党・労働組合

私は1917年に堅信礼を受けています。その直前に洗礼を受けました。他の兄弟姉妹も堅信礼を受けました。両親は、二人とも社会主義者で、反教会の立場をとっていたので、教会から脱会していました。私の母方の祖母は、アイヒェスフェルトの出身です。そこに彼女の家は農場を所有していましたが、1848年の革命で彼女の両親は命を失いました。叔母さんが農場を管理していたのですが、彼女が学校をでてみると、農場もそれに付属するすべてもカトリック教会に飲み込まれていたのです。それで、私の母が生まれた時にカトリックの牧師が来て、彼女を洗礼しようとしたのですが、祖母は牧師を追い出しました。その時代に彼女は牧師を追い出したのです。だから彼女がどれほど攻撃的だったかは想像出来るでしょう。

両親は私に、堅信礼ではなく成人式をすればよいと言ったのですが、その年頃になると、学校でも同級生がみんな堅信礼を受けます。受けないと「彼は堅信礼を受けないんだってよ」と彼らに言われていやな思いをします。そこで、両親は子供たちの希望を尊重してくれました。しかし私は、1919年には教会を脱会しました。妻も結婚後に、脱会しました。

父は第1次世界大戦前からの工場労働者同盟組合員で、社民党の古参の党員でした。社民党が分裂して独立社民党の党員となり、合同後また社民党に戻りました。母は党員ではありませんでしたが、父よりもラジカルでした。組合員でも党員でもなかったのは、党費や組合費を払う余裕がなかったからです。とはいえ、父はどんなに困っても貧民救済金は受けませんでした。選挙権を失ってしまうからです。第1次大戦前は労働者の場合、3人で1票の投票権しかなかったのですから、貴重な権利でした。

私は徒弟修行を終えた1922年頃に社民党員になり、ずっと党員として残りました。名誉手帳も持っています。私の家族はみんな党員でした。労働組合は、徒弟見習いの時代の1918年に父が手続きをして、工場労働者同盟に加入しました。25年からは金属労働組合です。父が活動家でしたから、家

庭で労働組合に加入するように教育されていました。私の妻は、結婚前は従姉妹のところまで働いていましたし、結婚後は働いていませんから、組合員でも党員でもありません。

労働組合は労働者の権利を守ってくれますから、実際ありがたかったものです。第2次世界大戦後、突然解雇された時に、私は労働裁判所に提訴し、労働組合がこの裁判の面倒をみてくれました。その結果、未払いの賃金と7日分の有給休暇分の賃金を貰えました。

労働組合では特別な活動はしませんでした。第2次世界大戦後、AEG社で工場委員会の委員になったことはあります。党でも役職にはつきませんでした。昔は選挙があると、私たち若者が、投票していない人のところへ行って、投票に行くように頼んで回ったものですが、その程度の活動でした。

当時、父が読んでいた新聞は「民衆の友」でした。この新聞は、私も1933年に廃刊されるまで読んでいました。その他には労働組合の機関紙なども読んでいました。

父が尊敬し、影響を受けた人物としては、アウグスト・ベーベル、ヤスパー、ヴェーゼマイアーを挙げておきます。特に父がベーベルのことを褒めて、盛んに彼のことを話していたことを覚えています。ブラウンシュヴァイクの人物では、アウグスト・ユンケを挙げますが、父は彼とは表面的に面識があった程度でした。ブラウンシュヴァイクの党支部長だったエルヴィンは、両親と親しい労働者仲間でした。

11. 祝い事・余暇

私の両親の家庭では、誕生日と復活祭、クリスマス、年越しを祝いました。待降節（：クリスマス前の4週間）や聖霊降臨祭（：復活祭後50日目からの8日間）は私たちにとっては宗教的な意味は何もありませんでした。年越しには新年にかけて夜どおし起きていたものです。当時は、夏至祭りの習慣はありませんでした。待降節には、山からクリスマスツリー用の木を

持ってきて、それを売って、お金を稼ぎました。

私の家では、誕生日、復活祭、聖霊降臨祭にはケーキが焼かれ、コーヒーを飲んで祝いました。私たちの結婚式の祝いも盛大で素晴らしかったものです。でもそれは何度もするものではありません。

労働組合や党が主催するメーデーのお祭りには行きました。メーデーの集会は、第1次世界大戦前からあったのですが、当時は迫害されていたから、秘密集会でした。第1次世界大戦後、団体ごとに大々的にメーデーの集会や行進をしましたが、その後またふたたび中止しなければならなくなりました。そして、ヒットラーがメーデーを祭日にしたのですが、そこではみんなが望むと望まないにかかわらず、行進しなければならなかったのです。

私たちが小さかった時は、両親だけが労働組合や党の祭りに行きました。そこでダンスを踊ったりしたのです。少し大きくなると、一緒に連れていってもらいました。郊外のエルパー門で開かれるこの祭りは、私たちの家族にとって楽しい催し物だったと言えるでしょう。私たち子供も大人と一緒に踊ろうとしました。第1次世界大戦前は、メーデーは祭りではありませんでした。社民党が禁止されていた時は、男たちだけが職場ごとに森へ遠足をし、そこで会議を開いたのです。

私たちの両親は子供をつれてよく近郊の森へ出かけました。ケーゲルの玉も持って行って遊びました。当時、私たちは中州に住んでいましたが、クヴェルマーの森やクヴェルマー・ホルツが目的地でした。ニシン漬けやソーセージなどの家にあるかぎりの食料をみんな持って、ピクニックをして、晩の7時か7時半に家に帰ってきました。季節はアスパラガスが出る頃でした。5月頃です。その当時の缶詰工場では、アスパラガスの皮むきをする女のひとたちの仕事が終わると、それぞれの工場が催すアスパラガス・パーティがありました。その仕事についている奥さんたちの夫も招かれて、ここではすてきに陽気なワルツを踊ったり、ワインもたくさん飲んだということです。

子供の頃は、復活祭とクリスマスがもっとも楽しみでした。復活祭とクリ

スマスにはプレゼントを貰いましたし、誕生日には子供たちは銅貨をいくつかもらえたのです。それだけでも大喜びだったものです。当時は、今のような大きなプレゼントはできませんでしたから。

大人になってからはダンスを踊りに行くのが大好きでした。結婚後もよく踊りに行ったものですが、今でもまだできるかぎり行きます。昔は例えばコンサート・ハウスや郊外のカール通り、エルパーや郊外のレーンドルフの公共のダンスホールで、いつも土曜日にダンス・パーティーありました。結婚前は1人で行ったり、あるいは娘さんを連れて行き、終わると作法通りに、家に送っていきました。

それから昔はブロイツェムやリュニンゲンやリュームなどの在へまでも踊りに行きました。エルパーの「森の家」でのダンスはいつも素敵でしたから、好きでした。ブラウンシュヴァイクのコンサート・ハウスに大きなダンスホールが2つあります。それから「ホーフイェーガー」と「ゾルバー」も大きなダンスホールです。「ゾルバー」はもうありません。「コンツェルトバーン」には裕福な人たちが集まるので、そこで人に見られるのがいやだったことを覚えています。

20年代には私たちはよく飲みにでかけましたが、父は、金がなかったから居酒屋で酒を飲むということはなかったと思います。母の工場のアスパラガス・パーティーがせいぜいの楽しみだったのでしょう。

私たちの結婚当初は、いつも妻の従姉妹の「アルト・ハイデルベルク」に行きました。「アルト・ハイデルベルク」は、店の奥にケーゲル場はありましたが、レストランだけで、ダンスはできませんでした。それでその後は、「ブリュニング・ザールブロイ」や、日曜日には映画にも行きました。キャバレーの「ブルク・リンデ」にも行ったものです。今、「シュタット・ブラウンシュヴァイク」が建っているところにありました。ここは、ジンタカ音楽や踊りのあるダンスホールで、少し低級でした。ダムのパサージュには「ダム・パラスト」がありましたが、これも少し低級なダンスホールでした。「カフェ・マルクアルト」や「カフェ・ワグナー」にも行きましたが、これ

は普通のカフェーです。